

小企画展 武井武雄生誕130年記念 「ニコピンかるた」と「おもちゃ絵諸国めぐり」

令和6年11月21日(木)～12月16日(月)

【開催趣旨】

2024年は武井武雄生誕130年の年に当たる。童画家、版画家、童話作家、造本作家、デザイナー、玩具研究家、玩具作家などの肩書を持ち、さまざまな分野で才能を發揮し、日本の児童文化に多大な影響を与えた人物である。当館では、武井がかかわった2点の所蔵資料を中心に、蒐集を手掛けた郷土玩具を合わせて紹介し、その人となりや玩具について、知る機会とした。

また、武井が絵を担当した「ニコピンかるた」の共作者、童謡詩人の葛原しげる歎についても紹介した。

【展示資料一覧】

(すべてわらべ館所蔵)

番号	資料名※	産地・ 発行者名	制作	年代	備考
郷土玩具	1 青森金魚ねぶた	青森県	不明	1993年	藩政時代に青森で飼育された金魚がモチーフ
	2 笹野彫(お鷹ばっぽ)	山形県	笹野彫協同組合	1993年	サルキリという刃物で削り上げる
	3 三春玉兎	福島県	大黒屋	1990年代	三春は藩政時代から続く張り子の产地
	4 鴻ノ巣熊金	埼玉県	太刀屋	2020年	赤物玩具。桐の木屑を用いた練物
	5 小伝馬町犬張子	東京都	飯田省三	2005年	安産祈願。いせ辰五代目の作
	6 静岡祝鯛	静岡県	沢屋	2008年	静岡市西ノ宮神社のえびす講に出す
	7 金澤餅搗兎	石川県	中島めんや	2010年	加賀藩下級藩士の内職が発展、継承される
	8 奈良張子鹿	奈良県	萩森君子	1960年代	春日大社の神鹿にちなんだ玩具
	9 生玉人形(三番叟)	大阪府	前田直吉・アイ	1930～40年代か	生国魂神社と文楽の人形にちなむ
	10 鳥取黍殻雛(きびがら姉様)	鳥取県	柳屋	1960年代	柳屋初代の田中達之助が復刻、二代目も継承
	11 倉吉はこた	鳥取県	備後屋(三好明)	1996年	備後屋としては明で廃業。現在は工房が継承
	12 吉備津犬鳥	岡山県	(吉備津神社)	1950年代か	犬は盜難・火難除け、鳥は喉を守る
	13 高松鯛狛	香川県	大崎文仙堂	2005年	高松に伝わる嫁入り人形のひとつ
	14 大宰府鶯(うそ)	福岡県	(太宰府天満宮)	1970年代か	鶯替え神事の授与品。朴(ホオ)製
	15 長崎鯨潮吹	長崎県	不明	1950年代か	「鯨のだんじり」諏訪神社の山車を模す
	16 国分鯛車	鹿児島県	(鹿児島神宮)	2000年	赤物玩具。海幸山幸神話の釣針にかかった鯛
武井・ 葛原資料	17 ニコピンかるた	鈴木仁成堂	葛原しげる作・武井武雄画	昭和11年(1936)	いろはがるた。い・うの読みのみ色付き
	18 おもちゃ絵諸国めぐり	伊勢辰	武井武雄	昭和4～5年(1929～30)	北海道を除く府県の玩具の木版画集
	19 日本郷土玩具 東の部・西の部	地平社書房	武井武雄	昭和5年(1930)	郷土玩具収集のバイブル的書籍
	20 寶玉樂譜第一編ニコニコピンの歌	岩瀬一民	葛原しげる詩・弘田龍太郎曲	大正9年(1920)	岡本帰一装画。ポケットサイズ
	21 ニコニコピンピンの歌	東光閣書店	葛原しげる詩・弘田龍太郎曲	大正13年(1924)	岡本帰一装画。伴奏譜付楽譜

※郷土玩具の各名称は、『おもちゃ絵諸国めぐり』の表記に従う。

【武井武雄年譜】

『武井武雄 イルフの王様』 イルフ童画館編著 より抜粋

- ・1894(明治27)年6月25日生まれ。長野県諏訪郡平野村(現岡谷市)の裕福な地主(父は村長も務める)の一人息子として育つ。病弱だった幼少期は家の中で過ごすことが多く、空想の中で「妖精ミト」という友達と遊ぶ。
- ・小学生で「おおきくなったら絵描きになります」と作文に記す。中学生で友人たちと洋画研究会を始める。父の友人、島木赤彦(アラギ派歌人)らの後押しもあり、画家を志す。
- ・1914(大正3)年 20歳 東京美術学校(現東京芸術大学)西洋画科入学。
- ・1919(大正8)年 25歳 東京美術学校卒業。翌年研究科に1年在籍し、エッチング(版画の一技法)を習得する。
- ・1921(大正10)年 27歳 中村梅と結婚。絵雑誌『子供之友』などに、こども向けの絵を描き始める。
- ・1922(大正11)年 28歳 東京社(現ハースト婦人画報社)による絵雑誌『コドモノクニ』創刊の企画に参加し、創刊号の題字、表紙絵を手掛ける。
- ・1925(大正14)年 31歳 東京銀座の資生堂画廊にて、初の個展「武井武雄童画展」を開催。「童画」という呼称を初めて用いる。
- ・1926(大正15)年 32歳 蔦集した郷土玩具を収めるための館「螢の塔」(命名:北原白秋)を池袋の自宅に建てる。代表作の一つ、長編童話の『ラムラム王』出版。
- ・1927(昭和2)年 33歳 日本童画家協会を初山滋、川上四郎、岡本帰一、深沢省三、村山知義、清水良郎と結成。(1941(昭和16)年解散)
- ・1929(昭和4)年 35歳 自身が創案、創作した玩具の作品展「イルフ トイズ展」をこの年から毎年開催。
- ・1935(昭和10)年 41歳 「イルフ トイズ展」をテーマ別の創作玩具展に改め、第一回は「動物の展覧会」とする。初めての私刊本『十二支絵本』を刊行。
- ・1945(昭和20)年 51歳 郷里の岡谷市に疎開。池袋の家を空襲で焼失、作品や蔦集した資料、玩具を失う。
- ・1949(昭和24)年 55歳 前年には単身で東京に居を移していたが、板橋に新居を完成、「一掬庵(いつきゅうあん)」と命名する。
- ・1959(昭和34)年 65歳 児童文化に貢献した功績により紫綬褒章を受章。1967(昭和42)年には勲四等旭日小綬章を受章。
- ・1964(昭和39)年 70歳 美術著作権連合結成。理事長に就任。
- ・1968(昭和43)年 74歳 ソ連文化団体の招聘により「児童文化訪ソ団」を結成し、団長としてソ連各地を歴訪。
- ・1975(昭和50)年 81歳 『武井武雄作品集 I 童画』が東ドイツで開かれたコンクールで「世界で最も美しい本」としてグランプリを受賞。
- ・1983(昭和58)年 88歳 2月7日死去

【童画家としての武井】

31歳で初の個展を開催した際、自身の作品を「童画」と表現した。大正時代の児童雑誌『赤い鳥』などから発展した「童話」や「童謡」と同じく、「こどものための絵」として「童画」を位置づけ、文章を補足する説明的な表現ではない作品を発表していく。

なお、「童画」を辞書で引くと、「こどもが描いた絵」との説明もある。武井の意図する「童画」は武井の発案だが、大正末当時はどちらの意味でも使われていた。現在では、こどもの絵画作品は、おもに「児童画」と表現されている。

【玩具、郷土玩具との関わり】

童画を描くかたわら、児童文化としての玩具にも注目した武井は、全国各地の郷土玩具の蔦集にも熱心に取り組み、それらを天井高く並べた部屋は、「螢の塔」と北原白秋に命名された。残念ながら、その一大コレクションは、第二次世界大戦の空襲時に焼失したが、1930(昭和5)年に武井が発表した『日本郷土玩具』(東の部・西の部)は、当時の郷土玩具をめぐる状況なども知れる、研究や収集のための貴重な資料として高く評価されている。

また、集められた郷土玩具の一部は、『おもちゃ絵諸国めぐり』や『愛蔵こけし図譜』の木版画でも紹介され、蔵書票や年賀状のモデルにもなっている。

【「イルフ トイズ」は新しい！】

「イルフ トイズ」とは、武井が創作した玩具のブランド名である。「イルフ」を逆さまに読むと「フレイ」＝「古い」。つまり、その反対の「新しい」おもちゃづくりを志向している。昭和初期に行われた百貨店での作品展は大盛況だったが、デザイン画、作品ともに現存数はごくわずかである。なお、布製の人形に関しては、妻の梅子が作り手だった。

【カードゲーム】

武井は、かるたなどのカードゲーム制作を何種類か手掛けている。葛原歎しげるが読み札を担当した「ニコピンかるた」以外では、読み札も武井自身が手掛けた「漫画かるた 赤ノッポ青ノッポ」「イロハガルタ」「西洋歌留多(トランプ)」などが刊行されている。それらの絵札の美しさ、かわいらしさはもちろんのこと、中には読み札の語呂やナンセンスも楽しいカードゲームとなっている。

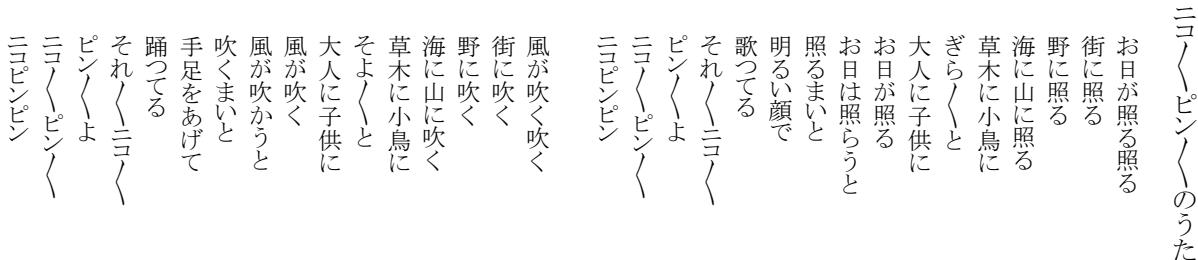
【葛原齒「ニコピン先生」】

「夕日」(へぎんぎんぎらぎら夕日がしずむ)の作詞で知られる童謡作家・教育者(主に女子教育)・児童雑誌編集者の葛原は、武井と「ニコピンかるた」を手がけている。「齒」の文字が一般的ではないため、作品の中では「葛原しげる」の表記を多く用いている。

【葛原しげる年譜】

「葛原幽略年譜」ニコピン先生こと葛原幽(しげる) 葛原文化保存会ホームページより抜粋

- ・1886(明治19)年6月25日 広島県安邦郡八尋村(現福山市)に生まれる。祖父は盲目の琴(生田流)の名手として知られる葛原勾当(本名:重美)。(勾当は高度な伝承折り紙の作品も残す)
 - ・1908(明治41)年 22歳 東京高等師範学校(東京教育大学、現筑波大学)卒業。以後、児童雑誌の編集者や女学校等の教師を務めるかたわら、童謡の創作を始める。
 - ・1911(明治44)年 24歳 龍治喜美子と結婚。
 - ・1912(大正元)年 26歳 博文館に入社し、『少年世界』の編集主任を務める。
 - ・1915(大正4)年 29歳 この年から1929(昭和4)年にかけて、作曲家の小松耕輔らと組んで、唱歌の楽譜叢書『大正幼年唱歌』と『大正少年唱歌』を出版。
 - ・1921(大正10)年 35歳 投稿雑誌『白鳩』に発表した「夕日」が室崎琴月作曲でレコード発売され、全国的に知られる。
 - ・1922(大正11)年 36歳 葛原作詞、弘田龍太郎作曲の「ニコニコピンピンの歌」が同名の楽譜集に掲載される。
 - ・1945(昭和20)年 59歳 長年勤務した東京の女学校が戦火で焼失したため、故郷に疎開。1960(昭和35)年まで、広島県内の女子教育に携わる。
 - ・1959(昭和34)年 73歳 藍綬褒章を受章。
 - ・1960(昭和35)年 74歳 東京都文京区の西片町に戻る。
 - ・1961(昭和36)年 75歳 母校の東京教育大学構内で倒れ、没す。



『ニコニコビンビンの歌』 弘田龍太郎作曲 葛原齒作歌 岡本帰一装画 三版 東光閣書店 大正13年より

【「ニコピン」とは】

「ニコニコピンパン」は葛原が思う「こどもはいつも笑顔で元気よく、好奇心豊かであれ」という考え方を簡潔に表現し

た言葉である。また、「ニコピンかるた」の箱裏には「円満」と「進取」だと示されている。自作の童謡集『こんころ踊』にも「『いつもニコニコ！ いつもピンピン！』これは、私が大きくなって、コドモ党としてのみならず、人間としての、唯一つの、旗じるしです。『ニコニコ』は平和です、円満です。『ピンピン』は進取です、活動です。(略)私の童謡は、やはりニコニコピンピン童謡です」とあり、届託のないこども像を理想としていた。

【葛原と武井のコンビ】

誕生日が同じ6月25日だった二人。童謡・童画の発表媒体として時代をリードした絵雑誌『コドモノクニ』は、武井がビジュアル面をリードしていた。1922～1944(大正11～昭和19)年の22年間に287巻刊行されているが、二人の共作は比較的初期に4回だけ確認できる。

「ニコピンかるた」の蓋裏の文「ニコピンかるたに就いて」から読み解くと、「ニコピン」活動推進のためにカルタ制作が企画され、すでに同社でカルタの制作をいくつか手がけている武井が、その絵札を担うことになったのでは、と推察される。

〈ニコピンかるたに就いて〉※は引用者注

ニコピンかるたは、子供も大人も、きっと、ニッコリさせます、元気をつけます。楽しみを与え、悦びを伝えます。しかも、人間界、自然界の大真理、大神秘をさえ暗示します。

ニコピンかるたは、真に子供を敬愛する学校と家庭とに、平和と希望とを溢れます。

ニコピンとは、ニコニコピンピンです。円満と進取です。この作者と、この画伯と。斯界※に類なき名コンビです。ニコピンかるたを発行する所以です。けだし、最も民衆的にして、最も印象的なもの、古来、この『いろはがるた』にまさるものは無いのです。乞う、江湖※の賛成をえて、ニコピンの美しく勇ましい旗を、全世界の上に、ひるがえさんことを一

※斯界=この(専門の)社会、この分野、この方面

※江湖=世の中、世間

【ニコピンかるた】

読札には少年少女の日常生活と、自然の情景、鳥や動物の様子、そして、なぜか大仏や仁王像なども登場する。また、1936(昭和11)年という時代背景から、「てんしょ鳩もいっしょに防空演習」(「て」の札)という戦争の気配も感じさせる読札もある。

・「ニコピン」にちなんだ札(抜粋)

い:いつもニコニコ いつもピンピン

つ:つえいたお年よりもニコピンピン

け:けふも皆でニコピンかるた

さ:さんたくぢいさん今年もニコピン(さんたくぢいさん=サンタクロース)

・その他の札(抜粋)

り:りきんだ仁王様おへそが出てる

ぬ:ぬまのなまずも出てみよ満月

む:むねに一ぱい朝日をあびて

ゐ:ゐ戸の蛙ものりたい飛行機

【鈴木仁成堂】

鈴木廣吉が立ち上げた出版社、鈴木仁成堂(仁成堂とも)は、大正後期から昭和初期にかけて、こども向けの冊子や紙おもちゃなどを数多く手がけた。武井とは、かるたに加え、同社が戦前に刊行した「幼児標準絵本」シリーズを監修するなど、深い結びつきがあった。戦後も鈴木出版として、童謡に漫画、アニメ番組、スポーツ選手などのかるたを出版している。

【『おもちゃ絵諸国めぐり』】

1929(昭和4)年から翌年にかけて、北海道を除く全都府県の郷土玩具を数点ずつピックアップし、版画40枚入りの作品集として頒布された。江戸千代紙を手掛ける伊勢辰が協力し、絵師・彫師・摺師が分担して仕上げる伝承木版刷の技法が採られ、外装には和本を包む「帙(ちつ)」が用いられている。この帙を綴じる爪が、石川県の代表的な郷土玩具「金澤餅搗兎」(右図)の杵になっており、武井の洒落っ気あふれるデザインが生かされている。



【『おもちゃ絵諸国めぐり』に掲載された鳥取の郷土玩具】

鳥取からは、「倉吉はこた」と「鳥取黍殻雛」の2点が選ばれている。はこた人形は、江戸時代天明年間(1780年代)に岡山から倉吉に移った絹商人の備後屋治兵衛が始めたとされ、現代に至るまで、鳥取を代表する郷土玩具の一つである。

また近年は「きびがら姉様」と呼ばれることの多い黍殻雛の方は、武井の『日本郷土玩具 西の部』によると、1897(明治30)年に栗谷町で駄菓子屋を営む奥村ふさの発案で生まれ、駄菓子屋で黍の実を蒸して売った後の、いわゆる廃物だった黍殻の皮を利用したものと記されている。皮のしわしわとなった縮みを髪の毛に見立てた独特な人形は、昭和の時代に柳屋の田中利子ら数人の女性らが引継ぎ、平成期は柳屋2代目田中宮子の手で作られていた。

【参考文献・Webサイト】

『武井武雄 イルフの王様』イルフ童画館編著 河出書房新社 2014年

『武井武雄の世界展 ～子どもの国の魔法使い～』イルフ童画館・NHKサービスセンター編集 NHKサービスセンター 2014年

『おもちゃ箱』武井武雄画嘶2 武井武雄著 銀貨社 1998年

『ラムラム王』武井武雄著 銀貨社 1998年

『日本童謡童画史』船木枳郎著 文教堂出版 昭和42年

『白権派の研究』個性と共に鳴る時代 清水康次著 大阪大学出版会 2023年

「童画の世界—絵雑誌とその画家たち」関連講演会「松居直氏に聞く—絵雑誌・子ども・絵本」国立国会図書館 国際子ども図書館 講演会 平成20年9月27日

chrome-extension://efaidnbmnnibpcapcglclefindmkaj/https://www.kodomo.go.jp/event/event/pdf/2008-09.pdf
2025年3月15日閲覧

「ニコピン先生こと葛原齒(しげる)」葛原文化保存会HP

<https://kuzuhara-bunka.jimdofree.com/>葛原しげる 2025年3月15日閲覧

(文責 長嶺泉子)